

頸髄損傷を乗り越えて 「14年待ちの『天使のパン』」を焼く

「多^た以^い良^ら泉^{みずき}己^きさん」——パン・ケーキ職人

病と向き合っている方や病気を乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方をご紹介します。
今回は、競輪レース中の事故による後遺症を抱えながら、パンとケーキを焼きつづける多^た以^い良^ら泉^{みずき}己^きさんです。



たいら・みずき

1975年生まれ。元競輪選手。2005年8月、レース中の事故で頸髄損傷と脳脊髄液減少症、高次脳機能障害を負う。リハビリの一環ではじめたパンづくりが評判を呼び、新聞やフジテレビ『アンビリバボー』などで取り上げられた。現在、自宅の一室を工房「Gâteau d'ange（ガトー・ダンジェ＝天使のお菓子）」にしてパンやケーキをつくっている。闘病生活とパンづくりについては『幸せをはこぶ 天使のパン』（宇佐美綾子著/主婦と生活社）に詳しい。写真左は妻の綾子さん。中央は長男、龍聖くん（3歳）。

夜明け前。北鎌倉の見晴らしのいい丘に建つ家から、甘い香りが漂い出す。

多^た以^い良^ら泉^{みずき}己^きさんがパンを焼いている。

1斤焼き上がるまで3時間。一日に焼けるのは3斤。全国から引きも切らない注文に追いつかず、取材に訪れた日に焼き上げたのは、5年前に注文されたパンだった。

多^た以^い良^ら泉^{みずき}己^きさんは、元競輪選手。2005年に結婚し、30歳で家を建てた。そのわずか5か月後に、事故は起きた。

ゴール直前、後続車のタイヤが接触して落車。時速70キロで走っていた自転車もろとも跳ね飛び、頭から落ちた。

頸髄損傷の重症を負った。首から下の体が麻痺し、知覚神経にもトラブルが残ったが、必死のリハビリで3か月後には杖を使って自力で歩けるまでに回復した。医師から「奇跡」と言われた。

だが、大きな後遺症がふたつ残った。髄液が漏れつづける脳脊髄液減少症と高次脳機能障害。記憶力や集中力が低下して、感情のコントロールが難しくなった。

リハビリの粘土細工にヒントを得たパンづくり

入院中にリハビリで粘土をこねる姿を見て、「パンをつくったら」と提案したのは、妻の綾子さんである。

もともと、自分のおやつにケーキやクッキーを焼く少年だった。綾子さんと出会ったころは、競輪が休みになる雨の日によくケーキを焼いた。

引きこもりがちだった多^た以^い良^ら泉^{みずき}己^きさんは、パンづくりに熱中した。日常的に頭痛や神経痛に悩まされ、左脚に残った麻



総子さんがラッピングし、手紙を添えて発送する。



一度に焼ける数は少ないが、家庭用オーブンを愛用している。

「原材料はなるべく自然に近いものを使い、生地にストレスをかけないようにそっとこねる」(多良さん)。現在、パンの注文は14年先まで入っている。注文から何年も時を経て届けられるパンは「天使のパン」とも呼ばれるように。(店頭での販売はありません) <http://gateaudange.com>

パラリンピックへの挑戦 うつの発症

痺で長い時間立っているのもつらい身だったが、「パンに夢中になっている間は痛みを忘れられた」のである。競輪選手の休職期間は3年間と決められている。選手に復帰したい——その願いはかなわず、事故から3年後の2008年、多良さんは選手登録手帳を返却した。

事故で障害を負った元競輪選手のパンが絶品——。評判が評判を呼び、メディアでも取り上げられ注文が殺到した。引退後、多良さんは落ち込むこともあったが、パンやスイーツをもくもくと焼いた。注文の管理や配送の手配は、総子さんがこなした。「食べるとなぜか涙が出ました」という手紙が毎日のように届き、それを一通一通、多良さんに読み聞かせ、総子さんが返事を書いた。

2010年5月。多良さんは、自転車競技でパラリン

ピックを目指し、初出場した大会で優勝を果たす。その後も自己ベストを更新しつつづけたが、激しいトレーニングとストレスにさらされて、ついに酸欠が原因で脳の状態が悪化。うつ状態になった。

3年前、待望の長男が誕生する。

泣き声は、昼夜を選ばない。もともと事故の後遺症で深く眠ることができなかった。その睡眠がさらに減り、心身のバランスが崩れた。うつが悪化して部屋に閉じこもると、食事もできない。話もできない。

もちろんパンも焼けない。感情を抑えきれず、暴発した。ドアを蹴破り、服やかばんを手当たり次第に引きちぎる。

総子さんは赤ちゃんを片腕に抱きながら、暴れる夫を止めなくてはならなかった。必死になだめても、ますます興奮し、胸を刺すような言葉を浴びせられた。そのうえ希死念慮(※)もあって24時間、目が離せない。多良さんがいやるので、親を呼ぶこともでき

きなかった。

「もう知らない……!」

疲れきった総子さんの気持ちが切れかけた、ちょうどそのころだった。多良さんが処方薬をすべて一度に飲んで倒れたのは……。第一発見者は生後8か月の長男だった。

「パパア! パパア!」

多良さんは救急車で運ばれ、さいわい、一命をとりとめた。

*

「それまでは、自分の病気を認めたくない気持ちが強くなりました。だからうまくいかないことがあると、余計にいらだった。最近では、最先端の脳波検査や血液検査などで自分の状態がわかってきて、落ちついて対応できるようになりました。病気を受け入れられるようになった。そのことが大きいですね」

いまでも、急に話しかけられたりすると自分が何をしていたのかを忘れたり、予定を変更されるとイライラする。「でもパンに向き合っている

と無心になれます。パンを焼いて、3人で朝ご飯を食べて、長男と散歩に行く。情緒が安定します。またワーツとやっちゃったなと思ったら、忘れないうちに日記に書くんです。読み返して、反省します」

見晴らしのいいリビングで、多良さんの表情は、とても穏やかだった。

「彼は競輪選手よりパン屋さんが天職なんですよ」

と、総子さんは笑う。

「いま自分があるのは、奥さんが、細やかに、ぼくを支えてくれたから。ひとりではここまで生きてこれなかった。これからは家族三人、輪になって一日一日、歩いていきたい。そう思えるようになるまで、10年かかりましたね」

朝2時から、多良さんはパンを焼く。何年も待てくれている人の顔を想像しながら、その人に喜んでもらいたい、その一心でパンを焼く。「食べてくれた人からいただいたお手紙が、ぼくたちの生きがいです」

気管切開しても話せる、 歌えることを伝えたい

——青野浩美さん—— 声楽家

病と向き合っている方や病気を乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方をご紹介します。
今回は、気管切開を克服し、声を取り戻してコンサートを続ける声楽家の青野浩美さんです。



あおの・ひろみ

1983年京都市生まれ。同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏専攻声楽コース卒業。原因不明の神経性難病を発症し、人工呼吸器を装着するために気管切開する。スピーチカニューレをつけてコンサートを続ける。「医療的ケア」の普及をめざし、講演活動も行う。「ほんとにはリハビリが大嫌い（笑）。毎日甥っ子を抱っこしたりお風呂に入れるのがいいリハビリですね」。著書に『わたし“前例”をつくります』（クリエイティブかもがわ）。

車椅子に座ったまま喉元のスピーチカニューレに指先を添えて歌いだす。

シューベルトの「野ばら」。伸びやかなソプラノにたちまちひきこまれる。

青野浩美さんは声楽家をめざす音楽学科の学生だった。卒業をひかえた2006年暮れ、突然、倒れた。気がついたら病院のベッドの上。それきり歩けなくなった。あらゆる検査を受けたが、原因は不明。「車椅子生活になるだけや」

当初、浩美さんは自分にそう言い聞かせた。家族の前ではつとめて平静にふるまい、しゃべり、家族もまた、これまでと同様に接しようとした。

「浩ちゃんには歌があるじゃないの」

高校時代から師事する歌の先生も、そう励ましてくれた。

声か。命か。秤にかけることはできない

しかしまもなく、無呼吸発作に襲われるようになった。

4日間、自発呼吸が回復しなかった。さいわい、意識は戻ったが、原因不明の無呼吸発作はその後もつづき、医師から「気管切開をして人工呼吸器を取り付けなさいと命の保証がない」と告げられた。

気管切開は喉の声帯の下に穴をあける。そこから人工呼吸器の管を通せば、自発呼吸が止まっても命は助かる。しかし呼吸が声帯に届かなくなるため、声を失う――。

「ありえへん。私から歌を取ったら何が残るん？」

声楽家にとって、声は命。声か、命か。考えるのもこわくて、何か月も答えを先のばしにした。家族の前では気丈にふるまったが、ひとりにな



左はピアニストで音楽学科時代の友人の新真由美さん。右は音楽の教師でもある母の真弓さん。浩美さんが声楽家をめざしたのはお母さんの影響が大きい。

ると、「涙の止め方がわからなかった」ほど泣いた。

「おまえ、アホちゃうか！」

ある日、友人に電話で怒鳴りつけられた。学生時代から知るカメラマンだった。

「命と声を秤にかける気なのか！ 命があつたら歌えるかもしれないへんやろ。命がなかったら歌もくそもあるかい！」

じつは説教される前から、気管を切開しなければならな

いことは、わかっていた。ただ、思い切れなかった。

浩美さんは、気管切開しても声を取り戻す手段がないか、インターネットで必死に探した。

ある日、スピーチカニューレという気管と声帯の気管をつなぐパイプ状の器具をつけ

れば、話せる可能性があることを知る。医師に聞いてみた。

「歌も歌えますか？」

「歌はむずかしいですね。そんな前例、ないですから」と、

医師は答えた。

「前例がないならつくればいいやん」。浩美さんはひそかに心に決めた。

手術は成功。医師が用意したカニューレはなかなか浩美さんに適合しなかったが、4

つめでようやく声が出た。

声量は減ったものの、声質は変わらない。母のピアノに合わせて歌ってみると、なんとか歌えた。

それから浩美さんは車椅子で歌うための工夫を重ねる。まず車椅子の仕様。膝が腰よりやや上に来るようにオーダー。するとお腹に力が入り、声に力が出るようになった。

背もたれは横隔膜の位置に合わせて設定。息継ぎは以前より0・1秒ほど長くなる。この僅かな差が歌全体に大きく影響してくるため、ピアノ奏者とアイコンタクトをとってタイミングを合わせた。

その年の12月。知人に「医療的ケア（※）のセミナーを京都で開くから、その後の懇親会で歌ってくれない？」と声をかけられた。

行ってみると、お酒の入ったにぎやかな会場だった。

「十人ぐらいしか聴いている人はいなかったと思います。でも、うれしかった」

浩美さんは新たな「前例」をつくったのである。

「伝えたい」ありのままでいいやんかー！

気管切開した声楽家。車椅子の子の声楽家。そんな評判が評判を呼び、いま浩美さんはいろんなステージに呼ばれて、毎週のように歌っている。歌うときに指で喉を押さえるのは、カニューレと切開した孔との隙間を押さえて息がもれないようにするためだ。すべての呼吸を声帯に送るための工夫である。

病名や治療法は、わからないまま。いまも就寝時は人工呼吸器をつける。肺活量を補うための上半身の筋力トレーニングや、自力歩行できるよう厳しいリハビリも続けている。もつと歌って、伝えたいことがあるからだ。

コンサートでは歌にトークを交える。

「気管切開してもスピーチカニューレをつければ話せるかもしれないのに、それを知らずに声を失っている人がたくさんいます。カニューレには相性があり、合わない人もいます。でも、あきらめんといてほしい」

声楽家らしいクラシックやオペラの楽曲だけでなく、メッセー

ジが届くように日本語の歌も歌う。

昨年、Let's Go（ありのままで）で大ヒットした「アナと雪の女王」もレパートリーに入れた。

「何も隠すことはない、障害があっても、ありのままでもいいやんかー！ という気持ちで歌っています」

浩美さんにはカニューレをつけてから自然に言えるようになった言葉がある。

「ありがとう」と「ごめんね」。

「昔から負けず嫌いやし、病気になる前は、なかなか素直に言えなかったんです。いまは、いっぱい言える」と、大きな声で笑った。

ベトナムで眼の治療を続けて13年 1%でも治る可能性があれば、手術する

—服部匡志さん—
眼科医

病と向き合っている方や病気を乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方をご紹介します。
今回は、ベトナムで失明の危機にある患者さんを救いつづける、眼科医の服部匡志さんです。



はっとり・ただし

1964年大阪生まれ。1993年、京都府立医科大学を卒業して同大学眼科の研修医に。2002年、ベトナムのハノイ国立眼科病院で網膜硝子体の手術指導医として治療と教育活動を始め、さらにラオス、ミャンマーなどの近隣諸国へ活動範囲を広げている。2014年に「メガネのミキ」を運営する三城HDの出資を受けてハノイに日本国際眼科病院を設立。13年間で無償で治療した患者さんは約1万5000人にのぼる。著書に『人間は、人を助けるようにできている』（あさ出版）。

網膜は一度傷つくと元に戻らない。服部匡志さんはその

網膜の手術を専門とする。

2001年、京都で開かれた学会に出席したとき、隣あわせたベトナム人の女性医師からこう頼まれた。

「あなたの技術をベトナムの医師に教えてもらえませんか？ ベトナムでは手術の技術が遅れていて、たくさんの人が失明しています。医療資材も不足しています」

服部さんは驚きとともに、戸惑いも感じた。

「自分が行けば、たくさんの人を失明から救えるのか……」

でも、ベトナムなんて行ったこともないし、見たことも

ない。僕が行っては何として本当に役に立つのだろうか」

現地の病院や政府からベトナム行きのお金が出るわけではなかった。支援団体があるわけでもない。自腹を切って行こうと決めたが、家族は反対した。収入はどうなるの？ と不安げな妻に「3か月だけ」と約束して、ハノイ国立眼科病院へ向かった。

いま、手術しなければ失明してしまう

日本から専門医が来ると知って、病院には連日、超音波白内障や網膜剥離など、高度な手術を要する増殖性網膜症の患者さんが押し寄せた。午前中に50人を診察し、診察が終わると10人の手術を行った。

想像以上の困難が待ち受けていた。ベトナム随一の眼科病院であるにもかかわらず、手術器材は古く、日本ではあたり前のことができない。スタッフとは言葉が通じないうえ、日本の常識は通用しない。患者が朝から手術を待っている



(左) 診察室は暑さとの戦い。患者さんがうちわであおいでくれることもある。(右) 目が見えるようになって患者さん二人に抱きしめられる。

寄付金について

特定非営利活動法人「アジア失明予防の会」は寄付を募っています。2003年に服部さんの恩師など有志によって設立された「NPOアジア失明予防の会」。寄付金はベトナム、ラオス、ミャンマーなどでの眼科医療技術の教育、治療、医療器材の購入などに役立てます。

連絡先：apbainfo@asia-assist.or.jp
http://www.asia-assist.or.jp

でも終業時間になるとスタッフたちはキャンセルして帰ってしまう。

妻と約束した3か月はあっという間に過ぎた。目的のひとつだったベトナム人医師への技術指導は、ほとんどできなかった。

「ここで帰ったら自己満足で終わる。手術を待っている患者さんがまだたくさんいる」

とにかくメドがつくまで続けようと、1年間に延長した。貯金を崩しながら日本とベトナムを行き来する生活が始まった。月の半分は日本でフリーランスの眼科医として働き、生活費と活動資金を稼ぐ。あとの半月はベトナムで治療にあたる。手術に必要な眼内内視鏡や医療資材も自腹で買いそろえた。

ある日、失明寸前の男の子が母親に手を引かれて診察室に入ってきた。すぐに手術が必要な状態だったが、母親は治療費を聞くと首を振った。そんなお金は払えない、と。服部さんがほかの医師と相談

している間に、母子は診察室から消えた。服部さんは病院の外まで追ったが、もう姿は見えなかった。

「あの子は手術をしなければ失明してしまうだろう……」

悔しかった。以後服部さんは、手術代を払えない患者に

「お金はなんとかするから手術を受けてほしい」と説得するようになった。治療費を肩

がわりするなんて、やり過ぎだと批判されたこともある。

バカ呼ばわりもされた。

「でもいま、僕が手術しなければ、その子は一生目が見えなくなってしまう。そういう

子に出会った以上、そのまま知らないふりはできない。医

者としてというより、人として自分の心が納得しない」

ベトナムの地で父の残した言葉を思う

「人のために生きろ」

胃がんで亡くなった父が服部さんに残した言葉だ。高校生のときだった。37歳で、ベトナム行きを決めたとき、心

の奥にあったのは、父の残したこの言葉だった。

失明寸前の、光しか感知できない状態を「光覚プラス」という。目の前に立てた指が

数えられる状態が「指数弁」。手術すれば、光覚プラスが指

数弁に回復する可能性がある。

「生きているなかで得る情報の8割が目から入ってきたま

す。だから失明するということは、人を絶望感に追い込む

こともある。指数弁までくれば、ひとりで歩けるようにな

る。字を読めるようになる。子どもなら学校に行ける。大

人なら働きに行ける。お年寄りなら孫の面倒をみるこ

ができる。つまり将来的に貧困から抜け出す助けになる。だ

から1パーセントでも治る可能性があれば、全力で手術します」

現実には、手術のかわいなく、失明してしまうケースも

ある。そのことを患者さんに告げるとき、服部さんは、医

者の原点に立ち戻る。

「患者さんのこれまでの人

生、家族、背景……を考えて、

どんな説明をすれば納得してもらえ

るかと思えます。医者

は病気だけ見ていてはダメで、ひとりの人として患者さ

んと向き合うこと。これがいちばん大切だと思う」

昨年、服部さんはハノイに、ベトナム人の医師たちと新しい眼科病院を設立した。目的

は、貧しい人の手術費を現地で賄える資金作りだ。収益の一部を資金にあてる。

「こんなに長くベトナムにかかわることになるなんて、想像もしませんでした。先のこと

とって、わからないものですね。だからこそ、今できるこ

とを精一杯やりたいんです」

最後に、日本の患者さんにも一言……と、お願いした。

「ぼくたち医者にできることは、病氣と闘う患者さんの手

助けをすることだけです。でも、いっしょに前を向いてみ

ましようよ。先のことはわからないかもしれないけれど、

前を向いて、いっしょに歩いて行きましょうよ」

食べることは生きること。 食が生きる力を引き出してくれる

— 川口美喜子さん — 管理栄養士

病気と向き合っている方や乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方をご紹介します。
今回は、食事に悩む患者さんに寄り添ったメニューを提案し、栄養サポートに取り組む川口美喜子さんです。



かわぐち・みきこ

1957年、島根県生まれ。大妻女子大学家政学部を卒業し、管理栄養士の資格を取る。島根大学医学部の研究生を修了、博士（医学）学位を取得。島根大学医学部附属病院栄養管理室の室長に就任し臨床栄養士に。2013年から大妻女子大学教授。現在、東京新宿区の『暮らしの保健室』で、高齢者でも食べやすい食事を提供している。著書に『がん専任栄養士が患者さんの声を聞いてつくった73の食事レシピ』（青山広美と共著／医学書院）。

川口美喜子さんが島根大学附属病院で管理栄養士になったのは、2004年。それまで20年近く、実験動物を相手に糖尿病の研究をしていた。「これからは栄養治療が重要になる。頼んだよ」
院長先生から突然そう言われて、病棟内にある管理栄養室の室長を任された。
川口さんは、ともかくも、病棟の中を歩いてみた。
「病院食を悩みなく食べられる方は、早晚、治療を終えて退院されるんです。でも、そうでない患者さんは……。入院時には食欲のあった方が治療の過程で食欲をなくしていくケースも多い。食べること

を全力でサポートしなければならぬ患者さんたちがいる。それがよくわかりました」
食事は痛みのない治療である。きつと、もつとやれることがあるはずだ……。

まずは「患者さんにできるだけ寄り添おう」と決めて、月に100回以上、患者さんや家族と面談を重ねた。

食材や調味料も見直した。要望にきめ細かく応じるには、マニュアル化された献立だけではむずかしい。大学の農園や地元のJAから果物や野菜を仕入れた。患者さんがのぞむ時間に食事を出せるように、栄養士が使える小さな調理場もつくった。

もちろん、大きな壁が、いくつも立ちちはだかった。

保険診療の制約もある。個別食を作るにも限度がある。ただでさえ忙しいスタッフにさらに仕事は増やせない……。でも、本当に急なサポートを要する患者さんは、全体の3、4%ほど。やる気になれば、ちよつとした工夫でやりくり

食欲のない小児がんの男児のための、“キャラクタープレート”。川口さんが厨房に「毎日、1食だけオムライスを出せますか?」と要請して実現した。男の子は目を輝かせ、付き添いの母に食べさせてもらった。アンパンマン、ドラえもんなどオムライス製キャラクターは日替わりに。考案したのは厨房の若い男性調理師。「もし、将来ぼくの子どもが入院したら、こんなふうに作ってあげたいと思ったから」。栄養士、調理師、看護師など多くのスタッフの協働作業によって、“食べてもらえる食事”が作られていく。



できるものなんですよ」

院内には「改革を急ぎすぎる」という反発もあった。

「でも、目の前に待ったなしの患者さんがいる以上、選択の余地はない。担当の患者さんが急変したら、医師や看護師は全力でケアします。栄養士も、栄養指導という役割を超えて、患者のケアに徹するしかないんです」

栄養士は料理より栄養指導をすべき、と叱られもした。

「でも、患者さんが望んでいるのは、口に出来る食事なんです。であるならば、〈食〉で応えるしかないんです」

こうして川口さんは、より専門的な栄養治療を行う「がん専任栄養士」を配置させるところまで漕ぎ着けた。

長い時間寄り添って心を開いてもらう

がん患者さんの気持ちは、がんになった人でなければわからない……。食べることを拒んで、心を閉ざしてしまう患者さんもある。

「やはり、時間が必要なんです。言葉や表情からは読みとれない、食事への思い、食べることへの意欲を手探りでさがしていくしかないんです。」

人と人との相性もある。熱心に寄り添うほど、煙たがられることだってある。ですからチームを作って接することが、とても大事なんです」

ある60代の婦人科系のがん患者さんがいた。術中血圧の低下で手術が中断されて長期入院となり、食欲不振におちいった。食事にはいっさい手をつけない。ベッドサイドで声をかけても、「用事はないです」と小さく答える。「顔を見に来ましたよ」というと、「もう来んでもいい」……。

だが、ここからが川口さんたちの仕事である。

手探りで食べてくれそうなメニューをためしてみる。義歯が合わないという情報を耳にして、ペースト食に代えてみる。だが……。彼女の顔はうつむいたままだった。長引く入院で、治療への意欲も失

われていくようにみえた。

ある日、トレイにのった食器のフタを透明のラップにして、中身が見えるようにしてみた。看護師から、「ひと口、食べましたよ」と報告があった。

これをさかいに、彼女に笑顔が戻っていく。世間話を交わしながら、食べたいものも教えてくれるようになった。少しずつ回復して、長い治療を終えて退院の日を迎えた。

「栄養士が本気で寄り添えば、栄養以上のこと」が起こる。食べることは、生きる力を引き出すこと。そのことを患者さんに教えられました」

最後まで食べることをあきらめないで……

いま、川口美喜子さんは、母校で管理栄養士を育てながら、在宅医療の栄養サポートに取り組んでいる。

「先日、こんなお手紙をいただきました。〈あのとき、父が最後に梅干しを一口なめたことを、家族みんなで思い出して、笑いました〉……。」

じつは、自問自答していたんです。病棟で自分が必死に

してきたことは、自己満足だったんじゃないかな……。でもお手紙を読んで、こう思えました。やっぱり、人間は最後まで食べることをあきらめちゃいけない。医療側も最後まで食べてもらう努力を惜しんじやいけない……って」

川口さんは、数年前に母親を亡くしている。突然だった。

知らせを聞いて島根県の自家に急いだ、あいにく大雪でなかなか辿り着けなかった。「……母の最後の食事を、ちゃんと食べないんですよ。悔しいな……って思います」

母は料理が上手な人だった。川口さんが食べることが好きになり、人に料理を食べてもらうことが大好きになったのは、母の影響が大きい。

最後に、川口さんの好物をうかがってみた。

「甘いものに目がないんです。自分が入院して食べたいと思うのは、やっぱりカステラとあんこだと思います」

人は、人に支えられながら、生きていく

—新井淑則さん— 埼玉県秩父郡長瀬町立長瀬中学校教諭

病気と向き合っている方や乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方を紹介します。今回は、両目の視力を失いながらリハビリ訓練を積み、公立中学校教諭に復帰した新井淑則さんです。



あらい・よしのり

1961年埼玉県生まれ。1984年中央大学文学部卒業後、埼玉県の中学校に国語教師として着任。28歳のとき右目の網膜剥離を発症。秩父養護学校に転任したが、34歳で左目の視力も失う。リハビリテーションセンターで訓練し、1999年に秩父養護学校へ復職。埼玉県立盲学校、現・特別支援学校埼玉保一学園を経て、2008年埼玉県秩父郡の長瀬中学校に着任。著書に『全盲先生、泣いて笑っていっぱい生きる』（マガジンハウス）。

溪流下りで知られる埼玉県

長瀬の町立中学校に、全盲の国語の先生がいる。

新井淑則先生。34歳で両目の視力を失った。

異変は28歳のとき、突然訪れた。ある日、サッカー部顧問としてグラウンドを走りまわっていたとき、右目の前をたくさんの虫が飛びかかった。

網膜剥離の前兆だった。

網膜は、カメラにたとえるとフィルムにあたる。角膜、水晶体を通して入ってきた光を脳に伝える神経細胞で、損傷すると再生しない。

何度も手術をしたが、右目の視力は戻らなかった。中学校から養護学校への転勤をよ

ぎなくされ転任。左目を頼りに教員生活を続けた。

しかし、3年後に、左目も失明してしまふ。

絶望と孤独……。胸が押しつぶされた

半年間、新井さんは家に引きこもった。ただ、ただ、茫然。寝てもさめても、闇。

「死んでしまえば楽になる」頭をよぎるのはそのことばかり。部屋の壁に拳を叩きつけては血だらけにした。

妻の真弓さんは、中学の音楽の先生だった。職場結婚である。妻、両親、子どもが3人の7人家族。真弓さんは教職を続けながら、3人の子を育て、苦しむ夫に寄り添って、義父母を励ました。

だが、そんな妻に、新井さんは八つあたりした。

「いいよな、お前は仕事に行けて——。失明した人間の気持ちなんてわかるまい。不幸なのはオレだけだ……」

耐え難い孤独感に苛まれた。ある日、まだ幼い長女と入



磁石つきスケールを使って、真っ直ぐに板書する。長瀬町立中学校に着任して7年目の今年は、1年B組の担任を受け持つ。右目を失明してから、23年ぶりの担任だ。授業はパートナーの先生とふたりで行い、その間、盲導犬のリルは机の横でおとなしく寝そべっている。

浴しているとき、長女のたわいないひと言に、激昂した。

お風呂場のガラス戸を蹴やぶり、血だらけになって救急車で運ばれた。八針縫った。

思いつめた妻がこう言った。

「……そんなにつらいなら、みんなで、死にましよう……」

新井さんの背筋が凍った。

「……いやだ」

「……わかったわ……」

*

真弓さんは渋る新井さんをなんとか外に連れ出し、視覚障がいのある人たちと引き合わせた。なかに、埼玉県の高校で物理を教える、宮城道雄さんという先生がいた。

「視力を失っても、教師に戻ることが出来ますよ」

だが、当初、教師に復職できるとは、とても思えなかった。せめて身のまわりのことぐらい自分でできるようにになりたいと、リハビリセンターへ通いはじめた。

点字の習得、白杖を使った歩行訓練、音声ソフトを使ったパソコンの練習、調理、洗

濯などの家事……。10か月間の入所訓練で、たくさん同じ境遇の人々と出会った。

「つらさと苦しみを共有できることが、何より励みになった。この世で不幸なのは、オレだけじゃない……」

ここが大きな節目だった。

家に引きこもっていたときは、できないことばかりを数えていた。車の運転もできない、本も読めない……。リハビリを始めて数か月で、できることを数えて喜ぶ自分に気がついた。点字が読めた、メールができた、白杖を使ってコンビニへ買い物に行けた……。

リハビリを終えるころには、復職への希望がわいてきた。リハビリの仲間が皆、按摩、鍼灸の道を選ぶ。

「どうせ苦労するなら、好きな道で苦労しよう」

ここから、養護学校に復職し、さらに中学校に復職を果たすまでの苦労は、むろん、想像を絶する。

だが、孤独ではなかった。宮城先生もいた。教員仲間

もいた。手助けしてくれたボランティアは、数え切れない。埼玉県議の知事も、長瀬町の町長も復職のために働いてくれた。盲導犬の初代クロード、二代目マーリン。妻と家族もまた。

2008年、46歳で、ついに中学校の教壇に戻った。

絶望から救いだしてくれたのは、他者

新井さんは、いま三頭目の盲導犬リルと電車通勤している。埼玉県と長瀬町が、駅から学校まで点字ブロックを敷いてくれた。教室のドアや机には、点字シールを貼った。

復職7年目の今年、待望の学級担任となった。

生徒の声を録音して何十回も聴き、休み時間にもなるべく生徒と言葉をかわして、名前と性格をおぼえる。

当初は緊張してかたくなっていた生徒たちも「全盲先生」にすぐになじんだ。

「この列は5枚です」(プリントを配るとき)

「そこは教室の後ろのドアです、淑則先生」

「先生、信号の押しボタン、押してありますから」

ごく自然に声をかけ、新井先生の手を引くようになる。

「僕が一生懸命に伝えようとする、生徒たちも応えようとして必死になる。ほくは教師として生徒を支えているつもりなんだけれど、じつは支えられているんですよ。」

絶望した僕を救ってくれたのは、さまざま「他者」でした。人は、人に支えられて、生きている。その言葉の重みをどれほど痛感させられたかわかりません

この秋、放課後に、ひとりの卒業生が訪ねてきた。

「オレ、こないだ、商店街で白杖持つてる人がいたから、思わず声かけちゃったよ」

新井先生に照れくさそうに話す。

「……ちよっとワルだった子でしてね」

「全盲先生」の目が、やさしく、ほほえんでいた。